Legends of shooting stars　ノアの方舟と１３人目の男

T=Era

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｅｇｅｎｄｓ　ｏｆ　ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｓｔａｒｓ　ノアの方舟と１３人目の男

【Ｎコード】
Ｎ２７２４Ｏ

【作者名】
Ｔ＝Ｅｒａ

【あらすじ】
西暦２７１２年、王国暦１９７年、史上最年少で特別情報調査局、通称ＳＳＩＳの中央本部局に配属された１６歳の少女、リリアンヌ＝莉歌・パウルグレンのもとに何の前触れもなくやってきた国王暗殺事件。
一方、父の後を継いだ弱冠１２歳の第４代国王エオラヌス２世も、ランガスカー王国を２００年近く牽引してきた円卓会議に潜む邪悪な陰謀に巻き込まれていく。

国王暗殺をきっかけに次々とつながってゆく事件が歯車を回す時、
運命はなにをもたらすのだろうか。

1．最初の流星（前書き）

ことに始まりというものは、当事者の関知せざる所で、それも偶発的に起こる流れ星のような現象であることがおおい。
さらに運の悪いことに、底を知らぬ深さと暗さを持つ始まりは、往々にして当事者だけでなく、その世界に存在する誰もが知りえないと決まっているのだ。

―歴史家・哲学者グローウィク・ダント（２７１４～２７９１）著
＝『ランガスカー王国小史』

1．最初の流星

リリアンヌ＝莉歌・パウルグレンは、特別情報調査局、通称ＳＳＩＳの特殊捜査課３等調査官だった。１６歳という異例の若さで王国首都アウシュトララーゼポリスの中央本部局の捜査課に配属されている。ちょうどこの日も、詳しくいえば西暦２７１２年王国暦１９７年１２月２３日であるが、彼女はいつも通り黒いスーツに身をまとい、腰まで届く長い金髪をわずかに風になびかせながら、本部局のエントランスへ向かった。

ふと視線を自動ドアの横にずらすと、同僚だが１１歳年上の、ボリス・カーライル３等調査官が不自然に立って私を見ていた。どう考えても誰かを待っていたのだろう。彼は右手を上げると近づいてきた。

「やあリリー。待ってたぞ」

「なんであんたが私を待つのよ」

リリーがやや突き放したようにいうと、ボリスは頭をぼりぼりと右手で掻いた。

「なんでって、今日はだってお前、『光臨の日』だぞ。式典警備は俺と一緒だろうが」

リリーの顔はみるみる白くなった。もとから色白ではあるが、それを超えて不健康なまでに色を失っていった。その次に発せられたのは、ほぼ金切り声に近い叫びだった。

「うわあ、忘れてた！今何時？」

慌てふためきながら腕をまくって腕時計を見ようとするが、腕時計を忘れていたようだ。ボリスはそんなリリーに全く構わず残酷に告げた。が、足はすでにエントランスとは正反対の方向へ向いている。

「９時４２分。集合は１０時。ここから式典会場まで３０キロだが・・・・・・」
「なんで私に電話よこさなかったのよ！！ぐっすり寝てたじゃないおかげで！！」
「・・・・・・いや、おまえが遅刻するのが悪い」
「うるさい！！なんで式典前に精神反射しなきゃいけないのよ。ボリス、行くよ！！」
「ちょ、ちょっと待ておまえいきなり・・・・・・」
ボリスを無視し、リリーは中枢神経を直列させ、飛行のイメージを脊髄から外界に放出する。精神反射のエネルギーが、激しくリリーの足元の空気を震わせた。

たちまちリリーの体は５メートルほど一気に上昇した。少し遅れてボリスもあがってきた。身長２０１センチのスーツの巨漢が浮く様子は、少し滑稽で、リリーはくすっと笑った。が、忘れてはいけない。もう１０分もない。水晶の広場までは文字通り３０キロある。
分速３キロを生身の人間が出して死にはしないかと、リリーは一瞬考えたが、年に一度の式典に遅刻して減俸される恐怖を考え、恐怖の天秤は減俸に傾いた。
「もう少し女っぽい言葉づかいできねえのか？」
「ボリス、なんか言った？」
その瞬間、体は何かに引っ張られるように前へと進んでいく。あまりの加速に意識を失いそうになったが、リリーは何とかこらえた。目が開けていられない。地上を蟻のようにうごめく勤労者たちは、上空を見上げてリリーたちをあっけにとられて見つめたりしていたが、リリーたちはすぐに彼らの視界から消え去ってしまった。

加速し始めてから、息ができず意識が遠のきかけているリリーは、やっと周りに空気膜を張ることを考え付いた。意識を再び神経に集中させ、空気を体の周りに吸い寄せた。

やっと息ができるようになり、ふと後ろを向くと、ボリスはすでに膜を張っていて、悠々とした顔で、さっきまで窒息寸前だった美少女を2，3メートル後ろから見ていた。
「知ってたんだったら教えてくれればいいのに」
時速３００キロ以上で疾走する（この表現は地上においてのみ正しいと思われる）体からリリーは愚痴をこぼした。
「優等生のおまえならいけると思っ……うわっ！なんだツバメかよ」どうやら鳥と激突しそうになったらしい。３００キロでぶつかったら即死だろう。いくら精神反射でも、自然の摂理には逆らえない。
「死ねばよかったのになぁボリスが」
「大丈夫だ、殉職する予定はないね」
「それは残念だなあ。……あ、見えた！」
ちょうど小高い山の尾根を視線が越えようとしたその向こう、広大な盆地に、今までに見たこともないような、数え切れないほどの色の光線に彩られ、純白の、古代文明であるギリシャに伝わるパルテノン神殿の柱のような、何か神々しいものが目に入った。
それらは、みなこの１００年に一度の式典のためだけに作られた、巨大な、神殿であった。
「す、すげえな……」
ボリスも思わず息をのんだ。ランガスカー王国3億２０００万人のうち、精神反射のできる９８００万人の人間のうち半分は集結しているのではないかという人々がそこにいた。
リリーたちは、降下してスピードを落としながら、集合場所である、聖アルカネッサ神殿（のちになってそう呼ばれていることを知った）の裏門を目指した。
神殿、というより中世のコロッセオのような形をした中央には、一体人が何千人横に並べるだろうというぐらいの大きな道が一本走り、どこから用意したのか、それを覆う深紅のじ絨毯が、はるか道の先にある高さ３０メートルはありそうな階段、そしてそのうえにある聖火台のすぐ後ろまで続いていた。人々は、巨大な道の下にま

るで大量発生したダニのように群がっていた。ボリスがため息をつきながらいった。
「こんなんどう警備しろってんだよ」
「守ると言われたら、守らなきゃ」
「そういや、あと何分だっけ」
「うわあ、忘れてた！！あと・・・・・・」
いいながらリリーはふと、腕時計を忘れていたことに気づき、下のコロッセオの巨大な集光水晶時計を視界に入れた。
血液が頭から消えていくのが分かった。虚脱した目をボリスに向ける。
「集合時間、過ぎちゃった」
　ボリスはそれを聞いて突然目を向いたと思うと、すぐ白眼になり、地上に転落するかのように落下していった。精神反射による急降下でないことはわかった。リリーは全速力で垂直に降下し、地上すれすれでボリスの巨躯を受け止めた。
「お、重い・・・・・・どけよさっさと！！」
「ひいっ！！！」
　情けない声をあげてボリスはリリーの両腕から転げ落ちた。顔は真っ白なままだ。
「ど、どうするんだよこれ。給料、給料が・・・・・・」
「今ごちゃごちゃいっても仕方ないわよ。早く！走って！」
　いうなりリリーは精神反射を使うこともやめて走り出した。裏門の近くには、すでにたくさんの同僚が整列して、特別情報調査局局長のあいさつを聞いていた。精神反射で音を自分の周りに収束させて、足音を鳴らさないようにした。前傾姿勢に拍車がかかる。
「待ってくれ、ちょっと待ってリリー」「黙れ！気づかれるだろ！」
あと５０メートル。その時、解散！と叫ぶ筆頭監事官の女の声が聞こえた。リリーは、死角に入らないよう壁ぎりぎりを走った。ボリスもそれにならって後ろを懸命に、悪くいえば小学生のかけっこのように走った。

解散してこっちを振り返った女がみえた。キャシー・ブロンクス3等調査官だ。リリーと同じ特殊捜査課3班所属の小柄で、髪をおかっぱにきれいにそろえていた。いつもと同じだ。
「キャシー、おはよう！今着いたよ」
「おはようリリー。見ればわかる」
空間を支配しているかのような目で自分より背の高いリリーを見下している。リリーはこういうタイプは苦手だった。後ろからボリスが、遅刻は俺のせいじゃないとぼやいた。
「ボリス、この女を待つ必要はなかっただろう？」
「いや、だって今日3人1組だろう、警備は。一人だけ行ったら悪いだろうが」
「遅れたのが私だったら待たなかっただろう？」
「いやいや、そんなことはない。ちゃんと待った」
「嘘だな。私だってその3人の中だ」
「・・・・・・おまえは朝早いから合わせにくいんだよ」
「おまえたちの生活習慣に問題がある」
「ちょっと待ってよもう二人とも。私遅れたこと班長に謝りたいんだけど」
リリーが会話を停止させると、キャシーは黙って後ろを振り返り、こちらに背を向けている、リリーと同じぐらいの背の男を指差した。
「ありがとうキャシー！」
「ただでは済まないと思うけど」
ぶつぶつ言っていたボリスも、リリーにそでを引っ張られてようやく謝る気になったようだ。リリーは、走ってその男の前まで行った。周りはすでに3人1組での行動を開始していて、その場に残っていたのは、全ての調査官の中でも特殊捜査課3班の6人だけになっていた。
「班長、遅れて申し訳ありません！」
班長で今年35歳になる、クラウゼヴィッツ・カルロフ1等調査官は、軍服をきた将官のような、重厚な威圧感を体中に満たしてリリ

ーを見た。とても笑っているようには見えなかった。体感温度は2度ほど下がっただろう。
「リリアンヌ＝莉歌・パウルグレン3等調査官並びにボリス・カーライル3等調査官、それから、どこだ？キャシー・ブロンクス3等調査官は」
「え、キャシーですか？キャシーなら・・・・・・」
と言いかけて、はっとリリーは口をつぐんだ。全く責任のないキャシーまで怒る気だろうか。
それを察したのか、先にクラウゼヴィッツは口を開いた。
「大丈夫だ、今回の一件については叱責はしない」リリーは思わずふうっ、と息を漏らした。後ろでボリスも息を漏らした音がした。いつのまにかクラウゼヴィッツのうしろを通ってキャシーが横に並んでいた。
「おまえたち、帰還を命ずる。別命あるまで自宅待機だ」
一瞬リリーは何を言っているのか分からなくなった。ボリスは冬だというのに激しく発汗し、なにも変わらないのはキャシーだけだった。
「え、あの、班長、今さっき叱責はしないと・・・・・・」
「ああ叱責はしていない。自宅待機を命じているだけだ」
「ええと、それは、警護任務には当たらない、と解釈してよろしいですか？」
ボリスが蚊が殺虫剤を噴射させられた直後の死にそうな声でいった。
「ああ、そういうことにもなるかもしれない」
クラウゼヴィッツは微動だにしない。
「わかりました。ご命令に従います」
「お、おいキャシー！」
ボリスはあわてて止めたが、キャシーは軽く一礼すると、回れ右をして視界から消えた。
ボリスが名残惜しそうに後ろを向いたままだ。クラウゼヴィッツの

顔だけが突然変わった。
「さっさと行けい！」
「うわあはい！」
びっくりしてリリーはその言葉をこぼしてしまった。ボリスは、いってしまったか、という顔をしているが、そもそも生気がなかった。
「スライ、ランゼル、行くぞ」
同じ班のスライ・アーボーク３等調査官と、ランゼル・アルベルト２等調査官がクラウゼヴィッツに呼ばれた。視界には入っていたものの、すでにリリーたちは意識からは締め出されていた。
二人は力なく敬礼をした後、十字架を背負っているような沈鬱な雰囲気を漂わせて、先を行くキャシーを見据えた。
「・・・・・・給料、大丈夫かな」
「自宅待機だから、一応仕事はしてる……ことにはなるんじゃない？」
「だといいけど・・・・・・ボリスのうちって何やってんの？」
「・・・・・・パン屋」
それだけしぼりだすと、二人は顔を見合った。死者の形相をしていた。同時にため息をつき、空を見上げた。空は、憎たらしいぐらいきれいに青だった。
全ては、この空から、始まったのだ。

2．動き出した歯車

リリー、ボリス、キャシーの三人は、一体どれだけの時間をかけて築き上げたのか、考えるだけでめまいがしそうになる高さ１６メートルほどの白い城壁の横を、あまり元気とは言えない歩幅で進んでいた。城壁の中からは、観衆の歓声（悪くいえば奇声ではあるが）が、三人を疎外するかのように聞こえた。

先史には田園地帯だったと言われるこの地方は、アウシュトララーゼポリスのアスファルト舗装道路のようなものは一切なく、むき出しの砂利と石ころ、周りにはちょうど甘い樹液を滴らせて昆虫をはべらせる木がかろうじて道と林を分断していた。この聖アルカネッサ神殿を除けば、周りは何がいるのかさえよく分からない、群青色の森が広がっており、人が住んでいる気配がない。こんなところでは、非能力者階級の最下層民の集落もないだろう。青々と茂る葉が逆に不気味とさえ思える。

「どうする？自宅待機って言われちゃったけど・・・・・・」

リリーがさっきから漂う沈鬱な、もっといえば今後の生活に打撃を与えられてしまったショックから来るある種の空気を追い払うためにやっと重い口を開いた。ボリスは自分が捜査官であることさえ忘れているような背の曲がりようで、リリーは杖があったらボリスに差し出したい気持ちでいっぱいだった。

驚くことに単独行動の多いキャシー・ブロンクスが、二人と並んで歩いていた。といってもその表情筋と背骨に何ら変化はなく、せっかくリリーがキャシー振りまいた笑顔の種も、キャシーが自分で芽を出す前に掘り起こしてしまった。

キャシーが答えないことを察して、ボリスが答える。

「俺は本でも読んどくよ。歴史好きだし」

「私もボリスのうち行っていい？暇だし、なんか一人でいてもさびしいし。母さんは・・・・・・まだ休みがもらえないから」

ボリスは一瞬リリーを細目で一瞥したが、ああ、と一声呟いた。
「リリーの母さんってのは、あれだろ、執政官のブルームハルク・ナイトレイゼ伯爵んとこのお手伝いさんだっけ？」
「うん、一週間に一度だけ帰ってくるんだけど・・・・・・」
「二十歳にもなってない娘を一人で家に一週間も預けとくのか。大変だな、おまえんとこも。・・・・・・まあお前だったら大丈夫だろうけどな」
どういう意味よ、という念力を目に込めてリリーはボリスをにらみつける。
「ボリスのお父さんのパン屋さんは？」
ボリスは痛くもないのに痛いところを疲れたような顔をして、わざとらしいため息をついた。歩きながら小石を蹴り飛ばすと、罪もないのに蹴られた小石はうっそうと茂る森の中に消えていった。
「全然だよ最近は。景気悪いからさ、売り上げが伸びなくて。母さんも手伝うには手伝ってんだけどな」
「息子が稼がないから母さんが手伝ってるのよ」
「おまえが今日遅れなきゃ給料は減らなかったんだよ！」
「なに？私のせいにする気？ボリスの無能さを？」
ボリスはそれだけ言われると、さすがに腹が立ったのか、こぶし大の石を足で思いっきり蹴り上げた。怒りで精神反射が起こったせいか、石はバレーボールのサーブ並みのスピードで森の中に飛んで行った。
「じゃあ言うけどな、おまえが今まで俺にいくら借りたと思うか？そしてどれだけ返してないか、わかってるよな？いいんだな、俺を怒らせて。知らねえぞ」
「いいわよ。どうせ何もできないんだから」
その時、ドサッという音とともに、うぎゃっ、というか、文字では表記しがたい生々しい人の声がした。驚いて音のほうを見ると、そこにはたくさんの虻がたかる木があった。思わずリリーは顔をしかめた。

「ねえ、ちょっと、今人の声がしたよね？」
「ああ、俺にも聞こえた」「ボリス、確かめに行ってよ」
「嫌だよだってあれ・・・・・・虫がさあ」「男でしょ？」
「私見てくる」
突然別の声がしたので見ると、もうキャシーは声のしたほうへと歩を進めていた。リリーとボリスは、じゃあよろしくといった雰囲気を作り出したが、無言でキャシーが森に消えていくのを見つめていた。キャシーにたかる虫が、次々と落ちていく。
「・・・・・・なあ、キャシーってさ、人間なんだろうな？」
「たぶん」
「時々不安になるんだが」
「思う、それ」
キャシーの影は完全に消えた。残された二人は、完全に次の行動選択肢を奪われてしまった。つまり、「待つ」「追いかける」以外になくなってしまったのだ。
「どうする？追いかけよっか。虫は落ちたみたいだし」
「俺はもう構わんけど」
「ボリスってさ、本気で虫駄目なの？」
「・・・・・・以前親父がエイプリルフールにプレゼントっていって俺に焼いてくれたパンにイナゴが入っていた時以来駄目になった」
「それは・・・・・・ごめん」
本当ならおかしくて笑ってしまうはずなのだが、キャシーが茂みをかき分けてどんどん奥へ進むがさがさという音が聞こえてきて、気まずくなったリリーは口を動かせなくなった。
「追いかけようぜ」
ボリスがリリーに目を合わせずに呟くように言った。リリーは小さくうん、とうなずいた。二人は肩を並べて、キャシーの消えた闇の中に入って行った。

リリーたちの予想にたがわず、森の中は最悪だった。人の手が入

っていない、伸びっぱなしの茨や木の蔦が行く手を阻み、精神反射で刈り取りながら進まなければならなかった。ボリスが先頭に立って刈り取ってくれるのだが、超高速飛行に芝刈りと、これだけ短時間にエネルギーを使ってしまったら、体は持たないだろう。虫はもういなくなっていたようだったが、できるだけキャシーが通った後を行こうとした。

「くそっ、キャシーのやつ小さいから自分の背丈に合う分だけ刈り取りやがって。俺たちは通れねえっつうの」

「文句言わないでボリス。行かせたのは私たちよ」

「・・・・・・わかってるさ。しかしなあ、これはないだろ。まあ虫がいないだけでも良しとするか」

「あ、そこにゴキブリ」

リリーは冗談のつもりで行ったのだが、ボリスは一瞬足を動かすのをやめたかと思うと、震える手を前に突き出した。

「え、あの、ボリス・・・・・・？」

「うぎゃあああああっ！」

次の瞬間精神反射によってボリスの両手から高熱のプラズマが放出された。さっきまで行く手を阻んでいた忌々しい緑の集合は一瞬にして燃え尽きた。炎を上げる暇もなく、炭化する間もなく、蒸発したのだ。リリーは自分が大変なことをしてしまったということに気づいた。このままでは式典中に消防隊を要請しなければならない。リリーはとりあえず前で暴れているボリスを抑えようとして、ボリスの両肩を必死に揺さぶった。

「ボリスごめん！！冗談だって、やめて！」しかし、ゴキブリという単語を聞いて、そこにいると錯覚したのか、ボリスは狂乱状態で自分の周りの植物すべてを焼き尽くした。

「ボリス・・・・・・起きろ！！」

そう叫んでリリーは精神反射で、ボリスの後頭部に軽い衝撃波を打ち込んだ。鈍い音がして、ボリスは下手なサーカスの玉のように二回転してやっと止まった。リリーの方は激しく上下していた。呼吸

がもう持たない。やがて、ボリスはやっと正気に戻った声を発して、目をうっすらと開けてリリーを見つめた。
「ごめんな、リリー、ゴキブリなんか聞いて、錯乱しちまった。火は、大丈夫か？」
「ごめん冗談のつもりだったの。火は・・・・・・」
見なくても、一面火の海であった。炭化せず蒸発しても、まだ日は残り続けていた。黒々と煙が立ち込めている。すぐでなければ二酸化炭素中毒で死ぬだろう。キャシーのことを思った。大丈夫だろうか。
「逃げて、消防隊をよぼう。クビになるかもしれないけど・・・・・・しょうがないさ」
「本当にごめんボリス。私のせいで」
「言うなよ。錯乱した俺の心の弱さだよ」
力なくボリスがいった、その時だった。黒煙が、突如として下に流れ込み始めた。いや、むしろその煙が、火を覆い隠すかのように、その日に向かって風が吹いていた。
「これ、どういうこと・・・・・・？」
「花火大会でもしたの？」
びっくりして前を見る。もうもうと黒煙が立ち込めて前には何もなかった。が、かすかに見えた人影が、近づいてきた。ガラスのような肌が所々、煙とすすで黒ずんでいた。キャシーだった。
「キャシー！」
リリーはキャシーに我を忘れて抱きついた。キャシーははじめて動揺したような顔を見せた。煙と感情が融合したのか、リリーの顔にしずくが落ちた。キャシーは戸惑いがちな声で言った。
「おい、急に抱きつくなよ」
「ご、ごめんキャシー、でもほんとにありがとう！私たち死ぬかと思ってた！」
「ここにいたらどのみち死ぬわ。精神反射で炎の周辺に限定して空気の対流を起こしてる。そんなに長くは持たないからそれまでに火

が消えたら勝ち。でもそのせいで有毒ガスは全部地表にたまるから」
「おい、じゃあすぐ出ないと・・・・・・」
「うんボリス、やばいと思う。先に言ってて、私消すから」
そう言われて、何か言う間もなく、二人は反転し、残る体力のほぼ全力を使って走った。キャシーの姿は見えない。また置いてきてしまったのだ。だが、リリーたちは自分のことで精いっぱいだった。
外界の清潔な光の下に出たとき、二人は膝をついていた。もう体力は限界だった。思ったよりも煙は高くは上がらなかった。これなら気づく人もいないだろう。しばらく歩いて、城壁に体をすがらせた。
「キャシーのやつ、大丈夫かなあ」
ボリスが、息をする合間を縫ってやっとしぼりだした。キャシーとは、どういう存在なのだろうか。リリーは、自問自答した。キャシーを一人にしているのか、それともキャシーが自分たち二人を孤独にしているのだろうか。
思ったほどかからず、キャシーは歩いて出てきた。足がふらついているのをリリーは弱っていながらも見逃さなかった。あれだけ広範囲に対して莫大なエネルギーの精神反射を行ったのだ、意識を失っても仕方がない。精神反射は、無限の魔法ではないのだから。
「キャシー・・・・・・」
「わたしは、大丈夫だから、」
何かを続けようとしたとき、キャシーは突然その場に崩れ落ちた。膝が重力に耐えきれなくなったように落ち込んだ。からだは思い切り地面にたたきつけられた。
「キャシー！」リリーは、何とか自分を奮い立たせて走る。両腕に抱きかかえたキャシーは、わずかながら痙攣していた。さっきよりも、もっと大粒のしずくがリリーの目から落ちた。キャシーは震える手でリリーの手を握りしめた。
「馬鹿だな、リリー、おまえは私より４つ下だぞ。そんな妹のように私を扱うな」

「いや、いや・・・・・・」
涙が、止まらなかった。ゴキブリに端を発して、全く関係のないキャシーをここまで追い詰めてしまった自分の理不尽さに、リリーは耐えられなかった。ボリスは、こっちを黙って見ていたが、ふいに空を見上げた。深い息をする。涙腺を閉める魔法だろうか。
「すまんキャシー、火傷させちまったんだな、俺が」
リリーは、はっとしてキャシーの体を見た。なぜさっき抱きついたとき、そして今こうして腕にキャシーを抱いているとき気づかなかったのだろう。一見調査局でそろえたスーツには他のものと変わり映えはしないように思えたが、背中を見て、リリーの奥底は再び突き上げられた。
背中は焼け焦げていて、皮膚が露出していた。その皮膚も焼けただれている。普通の人なら、見ていられないし、即王立救急病院行きだ。
「別にいいボリス。気にはしていない」
全く表情を変えずに言うが、明らかにリリーが遅刻してきたときの無表情とは違った。何かを確実にこらえていた。
「俺も力があったらお前を治癒してやれるんだが、さっきのプラズマでもう体力がねえんだ。すまねえ」
「私・・・・・・ごめん」
リリーはまた泣きだした。キャシーは、はじめて表情筋を反射ではなく、自分の意思で動かした。
彼女は笑った。ほんの少しの微笑だったが、笑ったのだ。
キャシーはリリーの長い金髪をなでた。その腕に、力はなかった。
「おまえのせいじゃない」
リリーは耐えられなくなった。キャシーを思わず乱暴に振り落として、体中の水分という水分をすべて涙に変換した。口からは自然な叫びが漏れた。ボリスはキャシーに顔を向けられなかった。２０歳のキャシーに対しボリスは２８歳で、十分先輩なのだが、みているとどっちが先輩なのだか、この場ではよく分からなかった。

それでもキャシーは力を振り絞り、かすれる声で、しかしいつものように淡々としゃべった。
「石のあったところには、人のいた形跡があった。1人じゃない、3人はいた」
リリーは涙をやっとぬぐえたが、その言葉はまだ耳には届かなかった。代わりにボリスが答えた。まだ視線は空のままだ。
「3人以上も、か？」
「ああ。あと、こんなものが・・・・・・」
そういって、キャシーはズボンの後ろポケットに手を伸ばそうとしたが、ここにきてついに短剣で突き刺されたような痛みが背中をおそった。苦悶の表情を浮かべる。うっ、と声が漏れた。リリーが流れる涙を振りきって、手を横たわるキャシーの尻ポケットに入れた。中には、見慣れない金属製の円盤が入っていた。
「たぶん、通信機の類だろう」
また、かすれ声。
「通信機って・・・・・・なんなんだそいつら」
「わからない。あとはボリス、お前に任せ、」
途中で切れた。疲れと痛みが、頂点に達したのか、昏睡という深い眠りに落ちた。寝息がする。安堵感が混じって入るのだろうが、痛みで顔は幸せそうではなかった。
ボリスはふいに立ち上がった。空に向けていた顔をまっすぐキャシーにおろした。目は真っ赤になっていた。
「キャシー、一生忘れねえよ。あとで利子含めツケはたっぷり返してやる」
こぶしが痛いぐらいに握りしめられていた。リリーは、手を支えにしてやっと立ち上がった。
「私、救急隊呼ぶね」「ああ、任せる。俺はそいつらを追う」
いつになく真剣な目つきで、二人はうなずき合った。
その空気を引き裂いて、リリーの携帯が鳴り響いた。この着信音は、特別情報調査局のものだった。待ち受けを確認すると、同じ班

で、ボリスより2つ上の、スライ・アーボーグ調査官だった。
「もしもし、リリーですが」「リリー、今どこにいる？」
「すぐ近くです、城壁の」
「すぐに来い、中に」
頭が真っ白になった。自宅待機からまだ1時間もたっていないのに、突然の招集命令。気づくと、ボリスの携帯も、キャシーの携帯もなっていた。どれも同じ着信音だ。
こころなしか、城壁を越えた神殿の中の声は、歓声から、驚きと戸惑いの混じる、怒号のようなものが混ざり始めた。ボリュームもだんだん大きくなってくる気がする。
この時代の携帯には純粋な電話機能しかない。ボリスの時計は、10時42分。国王エオラヌス1世の登場は、確か10時20分。
「聞こえているのか？リリー、リリー！」
はっとして意識は携帯の中のスライに戻る。
「とにかく早く、大変なんだよ！！」
「えっ」
そういった瞬間、地面を揺さぶるような、ドーンという轟音が、神殿の中にたった一つ。
響き渡った。

3．国王、暗殺。

城壁は、その円周総距離２０？という長大なものだったが、それでもその爆音がもたらす衝撃は十分だった。

「スライ先輩・・・・・・？スライ先輩！」

必死に叫んだが、電話は既に切れていた。空しく、ツーツーという音が鼓膜に響いた。城壁の中は今日一番の怒号に包まれていた。いや、奇声もその中には混じっていた。混乱が混乱を呼びどんどんその叫びは大きくなっていく、耐えきれなくなったように、ボリスはリリーに、オレ先行ってくるといい、傷ついた体を奮い立たせて走っていった。さっき集合した裏門に向かうつもりだ。華麗な駆け出し、とはならなかったが、ボリスは振り返らなかった。

リリーは倒れて息だけをしているキャシーをじっと見つめた。汚れていても綺麗な顔だった。年は上なのだが、家系がそうなのか、身長はキャシーよりも一回り小さく、それでいて、リリーよりも強い表面と、フッ、と閉じてしまう意識の弱さをリリーに露呈していた。リリーは初めて、キャシーが愛おしいと感じた。いや、彼女にこれほどまでに近さを感じたのが初めてだろう。

リリーにとっては、あまりにも、純粋な女だった。

と、その時、ふっと。

風がひとつ吹いた。

横たわるリリーに降ろしていた視線を上げると、そこには。

「だいじょうぶ？」

そこには、いつの間にか、きっとキャシーと同じぐらいの年齢だろう、少年が立っていた。リリーは直接日本人を見た事はないが、リリーが生まれるずっと前に死んだ、リリーの曾祖母が日本人だったらしい。日本人、特に女性は髪がひときわ美しかったという話も聞く。それならばこの少年は日本人の黒髪をもっているということになるだろう。男にしては肩までの長い髪で、もしかしたらリリー

より、いや、調査局一の美髪といわれたキャシー・ブロンクスのものよりももっと綺麗かもしれない。だか、顔はどうだろう。ゲルマンの雰囲気があるといえばある気がするし、スラヴの雰囲気があるといわれればあるとも言える。ただ、ひとつ、リリーが直感的に感じた事。

彫刻。

リリーはそう思った。そこにあったのは、誰もが想像する、彫刻のような、ヒーローの具現化した姿だった。

「この子、ケガしてるんじゃないかな？」

聞かれて、リリーはやっと現実に気を戻した。「あ、ああっ、はい。背中が大やけどしてしまって・・・・・・」

「僕がなおすよ」「えっ」「ちょっとみせて」

とまどいながらも、リリーはわずかにキャシーから遠のいた。少年は、さっと膝をつくと、白く長い指でキャシーの体に触れた。キャシーはわずかに顔をゆがめた。何故か触れた時、リリーの心の中に、不機嫌なもやもやが一瞬あらわれた。が、心の中で首を横に振って打ち消した。

「背中だよね。ごめんね」そういって、少年は空気のようにキャシーを持ち上げたかというと、今度は羽毛に触るように、ふっと、キャシーをうつぶせに寝かせた。キャシーの見る目もない無惨な傷があらわになった。キャシーは苦しそうな顔をしているが、全く起きない。

「精神反射のしすぎで、半昏睡状態に陥ってます」まるで新米看護婦のような台詞を、リリーは少年に対していった。そこで意識がはずれたのか、少年の全体がやっと見えるようになった。少年の容姿から来る異常なオーラに隠されていたリリーの意識がやっと解放された。何年使っているのか、あな、傷だらけの、ダークグリーンのジャケットに、黒いシャツ。はいているズボンも傷だらけだ。それもファッションといった類の物ではなく、何本かの傷は、まるで、何かに斬りつけられたような跡に見えた。

少年は、掌を傷の上にかざした。精神反射によるエネルギーが、掌をつたって傷口へ流れ込んでいくのが、リリーにははっきり感じ取れた、が、ここへ来てリリーは気付いた。この少年は、さっきからずっと自分の体の周囲に精神反射エネルギーを漏出し続けていた。周りにあふれだすエネルギーはすぐ近くにいたリリーやキャシーさえも包み込んでいた。

「あの、どうしてずっと精神反射を？」

「ん？ああ、何でもないよ。大したことじゃないさ。さあ、なおったよ」

言いながら少年はすっ、と立ち上がった。前髪がふわっ、となびいた。

「あ、ありがとうございます！えと、名前は？」

「きみは？」

「私ですか？リリー。リリアンヌ＝莉歌・パウルグレンです」

言うと少年は1，2秒リリーの顔を見て、笑った。

「いいな。日本人のお母さん？」「曾祖母が日本人だったって聞きました」

「そうか」

そういうと、少年は、じゃ、と一言、手をあげてから背を向けて歩き出した。リリーは思わず立ち上がってひときわ大きい声を出した。

「あの、名前」

少年は立ち止まって、しばらく黙っていたが、やがて小さな声で、

アレグロ

とだけ言った。風は、からからの優しさを運んで行く。涼しさで満たされていく。

リリーがありがとうございます、という前に、大きな風が巻き起こり、視界がくらむほどの砂嵐が起きた。思わず目をつむった。風はものの数秒で消え去った。

「ありが・・・・・・あれ？」

ようやく目を開けてありがとうと言いかけたときには、アレグロ

という名の少年は目の前から消えていた。
リリーの目はあるべき焦点を失って空を見つめた。どこにもいない。少年は、消えた。
「妙に堅苦しかったな、さっきのおまえ」
びっくりして下を見ると、あれだけ傷ついて動けなかったキャシーが目をつぶったまま、いつもの無表情で喋っていた。
「え、ちょっと、聞いてたの？」「あたりまえだ」
「そんな、盗み聞き？ずっと寝てたと思ったのに」
「目を開けるのがめんどくさかっただっただけだよ。それより、どうした、なぜあの少年と話すときに動揺したんだ」
何かを見透かされて、１６歳のリリーの心臓がひときわ大きくびくついた。
「い、う、別に動揺してなんか・・・・・・」
するとなんとキャシーはくすっと笑った。一世紀に一回の奇蹟がこんなところで起きた。
「まあいい。行こう」
言うとキャシーは、さっきまで重傷を負っていたとは思えないしぐさで立ち上がった。
「え、キャシー大丈夫？」
「あたりまえだ。あの少年が治癒してくれたとき、ずっとエネルギーを漏出していたのは、恐らく私たち二人に神経パルスレベルでの刺激を与えてくれていたんだろう。マッサージだな。だからエネルギーはほぼ正常値に回復したはずだ」
「うそ、じゃあもう飛べるの？」
「じゃ、先行くから、リリー」「えっ、ちょっと！」
いきなりキャシーが垂直に上昇した。どこからどう見ても健康な能力者に見える。リリーは恐る恐る精神反射をした。空気を振動させる飛行術は珍しいそうだが、リリーのお気に入りである。
「うわ、すごい！元に戻った！」
リリーは嬉しさの余り、空中で飛び回りながら、嬌声をあげてい

たが、やがて本来の目的を思い出したのか、キャシーのもとへ飛んだ。
「あそこで、スライ達が呼んでる」
キャシーが指差したが、リリーはそうではない方向にくぎ付けになった。いや、むしろそのほうが健全だろう。
　さっき飛んでいたときに見た、あの巨大な道。そのちょうど真ん中、きっと神殿の中央なのだろうが、そこに純白の道に似合わない、さっき森で上げた黒煙と同じ煙が上がっていた。周りを別の課の人や警備局の人々が過去って近づけないようにしている。
「あ、スライとランゼルが来た」
　やっと目線を離すと、二人は並んで飛んできた。
「遅かったじゃないか二人とも！」ランゼルが怒ったようにいった。
「ボリスはどうした？」スライが聞く。
「先に行きましたけど・・・・・・」
「そうか、なら班長に連れてきてもらおう。俺たちは全速力で本部に帰る」
「えっ？ど、どうしてですか」
　そこまでリリーが聞くと、ランゼルが突然緊張した面持ちで言った。声も小さかった。
「国王陛下が、式典会場に紛れ込んだ非能力者に暗殺された」
　リリーの頬を、冷たい滴が流れ落ちた。

4. 暗雲

リリーは、キャシー、スライ、ランゼルの3人と一緒に飛行しながら中央本部局を目指した。上空からは、森に残された大きな傷跡があらわになり、たまらず状況を知らないランゼルがつぶやいた。
「なんだありゃ？放火か？なんで気づかなかったんだ」「１００メートル四方は完全に焼失しているぞ」
話はどんどん深刻な方へ向かっていた。どんどんリリーは謝りづらくなったが、キャシーは何も言わずにまっすぐ前だけを見つめている。感情を顔と一体化させなくていい人は楽だな、とリリーは心の中で悪態をついたが、それが自分が原因であることを思い出し、口からは出ることはなかった。
だが、どうやってこの話題を切り抜けるかは、とても重要な課題である。
「消防局と司法警察には通報しとこうか、スライ？」
それを聞いてリリーはぞっとした。もしそんなことになり、ボリスが精神反射プラズマで森を焼き払ったことがばれたら、それこそリリーたち3人はクビになってしまう。
「あ、大丈夫です、通報しましたけど、キャシーと消しとめました。確認しましたので」
「ああ、そうか。・・・・・・・え、なんで警備してないの？」
「・・・・・・班長が」
するとスライは察したように、それ以上追及しないでいてくれた。しかし完全に空気の読めない人代表であるランゼルはなおも聞いてきた。
「班長が、どうしたんだ？」
「私たち遅れたんで帰れって言われたんです！」
ふっ、とキャシーが笑ったのにリリーはかすかな腹立たしさを覚えた。ランゼルは、ふーん、いったまま、何も言わなくなった。

とりあえず目先の危機を脱したことにリリーは安堵した。ここから先にどれほどの障害が待ち構えていたかは、リリーにはは知る由もなかった。

ＳＳＩＳの特殊捜査課３班は、中央本部局３階の一番西側にその本拠地を構える。本来民間人からは秘匿された部署であるため、窓はついていない。リリーは換気の悪さにうんざりした。

大抵、特殊という名前の付く職業は、能力者、つまり精神反射ができる人間のみが就業できる場合がほとんどである。この際、ＳＳＩＳの機構を説明していても悪くはないだろう。

ＳＳＩＳは、今から３２年前に、王国司法警察とは別に作られた、強力な法的権限を持つ捜査・執行機関である。創設したのが、数々の不祥事に見舞われて自業自得の最後を迎えた、サリエル・オーガストグラス侯爵であることは残念だが、一応こうしてＳＳＩＳの原型は整った。

通常捜査課は１から９班まであり、殺人から窃盗まであらゆる分野を王国司法警察とともに捜査する。このため、任務が組織を超えて重複することもしばしばであり、そのたびに功名争いが両者の間で起こり、ある時はそれが化学反応を起こして思いもよらぬスピード解決につながったり、ある時はそれがすぐ解決するはずの事件を、気がつけば１年もかかっていた、ということもよくある話だ。

しかし、それだけでは普通の王国司法警察だけで事足りる。王国司法警察には非能力者も混ざっているため、非常に捜査には効率性がみられる。

ＳＳＩＳの持つ最大の特徴は、１から４班まである特殊捜査課と、最悪の行政機関と陰で揶揄される、暗殺部隊、特殊執行課である。

特殊捜査課は、１班がおもに、王宮や貴族邸宅など、高い身分の人間に対する諜報任務を行う。かつて脳内捜索と苛烈な精神拷問でＳＳＩＳ生みの親であるサリエルの陰謀、”紫晶宮事件”を暴きだした功績を持ち、特殊捜査課の中でも比較的世間一般によく知られ

ている。『カラス』と陰口をたたかれることもしばしば。金のあるところに張り付き、群がり、追い詰めるからだ。

２班は主に企業内へのスパイ活動を行う。就職後に協力者を作って治安維持を行う王国司法警察とは異なり、就職からすでに行動を始める。この組織は１班と違いめったな人間が知ることはない。やっている仕事はあまりに過激で、人に言えるような内容ではない。企業スパイのごとく、社内の機密情報を平気で収集し、ＳＳＩＳに保管する。万が一事件が起きたときの証拠に用いるためだ。完全に犯罪だが、司法を超越した捜査機関であるＳＳＩＳに犯罪などない。

３班と４班は、これとは大きく違う。４班は、精神反射による非常線を張るプロ集団である。本部局内に居ながら、外の世界へと精神反射によって干渉し、一地点に対する集中的放電や、水素と酸素の空気中分離爆発による交通封鎖、さらには、物的攻撃などを行う。この精神反射技術は、王国内屈指の難度を誇る、？種特別精神反射試験の、遠距離干渉に受からなければならず、その合格率は、実に１００００人に１人という狭すぎる門。このために精神反射の能力はずば抜けており、現在所属しているのは、ジョゼフ・ボロザック１等監察官率いるたった７名であり、この７名が、この過酷極まりない任務をこなす。

３班の説明は後回しにして、先に、特殊執行課について説明しておこう。班はなく、常時１００人の精鋭が勤務しているが、他にもヨーロピア全土に構成員が存在する。エオラヌス１世統治下における最大の反乱、『ローマ・キリスト叛徒の乱』の時にその実態が明らかになった。この事件は、後々今回の事件に大きく関連してくるので、近々また話すことになろう。

その任務は、王政を脅かす存在の、事前処理である。事前処理には二つのパターンがあり、一つは、“忠誠化”である。通常の脳内捜索では、記憶をあらかじめコピーして外部に保存し、脳内に侵入した後必要な情報をコピーして運び出してから、捜査前のコピーの記憶を上書きする。このため記憶には全く影響がない。ただ一点、

捜査された記憶がなくなる点を除いて。
　忠誠化は、そんな生易しいものではなく、強制的に脳内に侵入し、敵性記憶をすべて抹消、さらに意図的な部分脳死を起こさせて、前頭葉機能の停止を行う。その後、国王に忠誠を誓う、という記憶を徹底的に脳内に記憶させて、最後に、言語機能を抹消して終わる。
　こうなると、前頭葉が止まっているために自分から判断することがきわめて困難になり、さらに失語症に陥るため意思疎通もままならない。おまけに国王に服従する強迫観念を何重にも植え付けられているため、反乱の可能性は０である。
　きわめて効率よく廃人を作り出すシステムといえるが、そもその人への脳内侵入は、先ほどと同じく、？種精神反射試験のうち、特殊技能・その他を修了し、且つ、特殊司法機関試験において、資格を取得した者だけが使える能力であり、それ以外のものが使うと、大抵の場合、もう一つの事前処理である、”浄化”がなされ、その人間が存在していた記憶が抹消される。
　これが最悪の行政機関といわれる最大の理由であったが、この歩く恐怖の存在によって、ランガスカー王国のエオラヌス１世統治期間が何とか一部の例外を除いて平和を保てた理由でもあった。
　そして、特殊捜査課３班は、特殊捜査課の中で最も巨大な組織である。ランガスカー王国に存在する全部で３５の藩王国のすべてに支所がある。３班の任務は、テロの未然防止及び捜査。それに直接かかわるのが、戦闘と捜査のプロ、３班だ。テロにかかわりそうな人物を事前にマーク、記憶収集を行い、いざとなった時には、正規軍、王国騎士団が出てくる前に完全に鎮圧するのが目標であった。
　が、今回の事は、３班にとっては、極めて大きな失態だった。国王の暗殺を目の前でいて止められなかったのだ。きっとボリスを探しているクラウゼヴィッツは頭を抱えているはずだ。
　真っ暗な部屋の中に三次元ホログラムが出現する。言うまでもなく、あの巨大な神殿である。

「状況を説明する」スライが静かに、だが、確かにいい始めた。空気がピリピリしている。クラウゼヴィッツと同期のランゼルは、静かに目を閉じたまま腕を組んで立っている。
「午前１０時２０分、聖アルカネッサ神殿にて、エオラヌス１世がご来光された。この位置だ。ちょうど聖火台の真下だな。本来はここから長い中央の道を通って、反対側の時計塔まで歩くのだが、ちょうど中央にさしかかった１０時３９分だ。爆発が起きるまで3分というところだが、ここでちょうど一回目の不審な行動がみられる。我々が集合した裏門に近いところの座席、・・・・・あまりに広くて今は詳細不明だが、とにかく、この周囲約１００００人ほどの中に、ロケット花火が突然大量に撃ちあがった。群衆はここで一仮名目の怒号に包まれるが、何とか鎮静を図る。王国騎士団の親衛隊が、ここで警戒を強めた。エオラヌス一斉の動きは鈍くなる。ここで次に、陛下の前に、また突然なのだが、大量の猫が通り始めた。どうも訓練されているようで、出番まで泣き声を上げず黙っていたようだ。現在その犯人は拘束されて尋問中だ。うちのほうでな」
　うちのほう。尋問されている側の精神が持つだろうか。
「そして猫に気をとられた親衛隊の一瞬のすきを突いて背後に突然一人の男が駆け寄った。気づいて制止しようと親衛隊の一人が振り返った瞬間、男は自爆した。これが１０時４２分」
「国王陛下は？」キャシーが聞くと、傍で黙っていたランゼルが首を横に振った。
「どうやら、体内に抗酸耐性ニトロを飲んでいたようだ。あれだ、飲んでアルカリの表面で胃液と中和して酸化を防ぎ、遠隔操作で爆発させられる。致死半径は１メートルから大きいものは１０メートルにまで達するという。非能力者どもの悪知恵の産物だ」
　リリーはおそろしくなった。能力者である自分たちが能力を日々磨きあげて行く傍ら、非能力者どもは、恐ろしいまでに科学力を発展させている。大工業地帯であるルール藩王国や、マンチェスター藩王国などは、ランガスカー王国の工業の一拠点だが、だいぶ前か

らその忠誠心には問題があるとされてきた。これまでもリリーたちはたびたび、この地方に飛んでは情報を収集していたものだ。
「それで、現在猫を離した容疑者を取り調べているが、指名は、ロブ・コリンズ。ブレーメン藩王国出身の鍛冶職人で、３９歳。反逆するには結構な御老体だ。近場では目立たない男だったようだ。というよりめったに人前に出てこずに、包丁やら剣やらを作り続けていたらしい。その男が所持していたものだ」
言うと、スライはポケットから、何かどこかで見たようなものをとりだした。
「表面に、小さい文字で”Ｋ'ｓ　ａｎｈｏｒａ”と書かれている。・・・・・・どうしたキャシー」
見るまでもなかった。キャシーは同じ様にポケットからそれをとりだした。
円盤型通信機だ。ランゼルまでもがびっくりしているようだ。
「・・・・・・キャシー、どこでそれを拾った？」
「森の火災を消火中に発見しました。周囲に人の気配が２，３名ほどしました」
「なんだと！？森に潜伏している可能性は？」
「恐らくあの火災は想定外でしょう。消し止めていた時にはすでに逃げていた、と考えるのが自然かと思われます」
期待はずれの答えに、スライとランゼルは同時にため息をついた。が、すぐに引き締める。
「恐らくこの・・・・・・今後”キッズ・アノーラ”と呼ぶことにするが、恐らくこの組織は今回の事件に関連している。宗教団体系の捜査をしている通常捜査課５班に協力を要請する」
「スライ調査官、王国司法警察には・・・・・・」
「伝えなくていい、これは我々の管轄だ」
ランゼルがいいながら向こうに振り向いて、部屋を出た。ドアがガチャン、としまる音が、妙に重かった。

5．キッズ・アノーラ

スライとランゼルはリリーとキャシーの二人に連絡あるまで待機とそっけなく命じたあと、暗くじめじめとした特殊捜査課3班の部室をあとにした。残されたリリーは、話を整理しようとキャシーに話題を振っかけた。

「『キッズ・アノーラ』って、知ってる？」

「ああ、ちょっとはな」

この答えにリリーはかすかな驚きを覚えた。自分は全く知らなかったからだ。

「それ、なんかの組織？」

キャシーはホログラムのほうに向いていた体をふいにそむけると、壁の方へ歩み寄った。手をそっと漆黒に触れる。

「組織というより、宗教団体だ。キリスト教は知っているだろう？」

「キリスト教・・・ええ、名前ぐらいは。確か王国国教会に国教が指定されて、弾圧された宗教の一派でしょう。私たちが生まれる前、５０年ぐらい前だっけ、ローマ藩王国で反乱があって」

「そうそう、その中核にいたキリスト教の秘密団体だ。もうあの頃キリスト教は禁制だったからな。うかつに信仰なんてしてたら、思想警察・・・・・今は私たちがやってるが、捕まってしまう。文化政策でキリスト教系の歴史的文化遺産の保護が決まっていたことは救いだったが、逆にそれがキリスト教徒を増やす要因になってしまった。まあ聖書はすでに封印文書館以外から駆逐されてるからな。だれかがたぶん違法にコピーしたものがはびこっているのだろう」

「それで？その組織と今回の事件に関連が？」

「ああ、たぶんね。私が火を消していたときに聞こえた話声は、正確には3人だ。1人は女の声だった」

「女？」

「うん、キッズ・アノーラは、キリスト教信者だったら一応誰でも

入れる。『塔の会』とか、『聖なる夜明け団』とかは男尊女卑の傾向が激しいんだけど」
いやに詳しいな、と思い、リリーは壁を見たまま動かないキャシーの後ろから近付いた。
「どうしてそんなに詳しいんだ？」
キャシーは、突然口を閉じた。しばらく気まずい沈黙が流れた。
「あ、あのさ、キャシー、私悪いこと言っちゃった？」
「・・・・・・いや、そうじゃない。ただ、その質問はしないでほしい」
明らかに悪いことを言ったようだった。リリーは小さくうん、と言ってそれきり話さなかった。
気まずくなるかと思ったが、これは逆にリリーの思考回路を整理する時間になった。
５０年前の『ローマ・キリスト教徒の乱』の残党がふたたび反乱計画を起こして今回の国王暗殺を決行したのなら、恐らくこの事件解決後に王国内にキリスト教徒は存在しなくなるだろう。思いもかけぬ人口減少が起こるかもしれない。ただ、リリーはこの事件のことを何も知らない。恐らくスライとランゼルは、通常捜査課５班に行って、その事件の事、宗教団体系の情報を洗いだすだろう。
どうするか、とリリーが思っていた時、携帯の呼び出し音がなった。前世では、お気に入りの音楽を入れていたらしいが、リリーには到底理解できなかった。なぜ電話にまで音楽を求めるのだろう、ただのツールである電話にエンターテイメント性はいらないだろう。と。
ボリスからだった。
「ボリスどこいってたのよ！！」
「すまんすまん。ところで、今本部か？」「ええ、そうよ。ずっと待ってるんだけど」
「・・・・・・根に持つなあ。班長も一緒なんだけど、今からすぐ来てくれる？」

「どこに？」
「そこから遠いだろうけど、余裕持ってきていいから。朝みたいにブッ飛ばさなくていい」
「どこって聞いてんのよ」
「・・・・・・ブダペスト藩王国だよ。キッズ・アノーラの本拠地がある」
リリーはしばし沈黙した。ブダペスト藩王国。
そこは、リリーの母、アネッサ・パウルグレンが働いている場所だった。

「アネッサ君、紅茶」「はい伯爵」
椅子の上には、４４歳の藩王が片足を組んだまま長大なテーブルの端に座っていた。金髪のそれは、初老というよりはむしろ青年に近かった。
アネッサは、伯爵のもとから８メートルも離れたところにあるキッチンからアールグレイをつまみ、慣れた手つきで抽出していく。芳醇な香りが、この距離からもほのかに香る。
５分ほどして、アネッサは紅茶を指示通り伯爵に渡した。
「ありがとう。座って」「はい」
アネッサは言われるがままに伯爵の斜め前にある椅子に座った。ブルームハルク・ナイトレイゼ伯爵は、自分より年が４歳下の召使いを自分の目線と同じ高さに座らせた。３５いる藩王の中でも彼は珍しく、召使いを自分と対等に扱った。
「国王陛下が、暗殺されたそうだ」
びっくりしてアネッサは思わず腰を浮かせた。ガタン、という音がして、周りにいた５，６人の執事や召使が一斉にアネッサを見た。アネッサは恥ずかしくなってこじんまりと体を収めた。ブルームはわらっていた。
「ちょっとは落ち着かないか。たかが暗殺ぐらいで」
「は、すいませんでした」

しかしいつものことながら、ブルームハルクの言動はいつも端的に激しい。不敬罪としか思えないようなことさえ堂々という。というより、彼は日ごろからエオラヌス1世を嫌っていた様子だった。世間一般には『賢策』といわれた、能力者・非能力者選別勅令を発令した時は、あのくそだぬき、と一喝して、一つ5万ドルはするティーカップを無惨にも床にたたきつけたほどだ。

「情報では、キッズ・アノーラが関与しているそうだ。現場から複数の通信機が見つかって、それに奴らの紋章が刻まれていたそうだ」

「そうですか」

「君の娘さんが担当しているぞ」

アネッサの額から冷や汗が吹き出してきた。娘が、そんな危険な仕事をしているとは・・・・・・確かに、ＳＳＩＳと聞いて覚悟はしていたが、入局2年目でこの試練は、あまりに少女にはきついだろう。

「あの子は、大丈夫でしょうか」

「おや、あなたは自分の娘を信じていないのか？」

「・・・・・・いえ、そんなことはありませんが」

「嘘をつけ。不安が顔ににじみ出ている」

黙ってしまう。返す言葉をよく失う。ブルームハルクという男は、どうも人を黙らせる能力にたけているようだ。数秒たってからまたブルームハルクが問いかけた。

「娘さんの父親の事は、まだ秘密にしているのか？」

少しためらってから、答える。

「はい、少し今娘には荷が重すぎると思います。まだ3年前の事件ですよ。父の記憶はすべて消したとはいえ、ＰＴＳＤを負っている可能性は否定できませんし」

「そうか。だが、ずっと秘密にしているわけにもいかないだろう。おそらく、この件もあいつがかかわっていると思う」

「えっ、なぜ、そう思われるのですか？」

「なぜって、俺は現在進行形であいつにいる唯一の友達だぞ？」

「・・・・・・」
「あいつはセント・ヘレナからはるばる脱獄して今この地のどこかで、夢を実現させようともがいているんだ。途方もない夢をね」
「あの人、今も優しいままでしょうか」
少し驚いた顔をして、ブルームは、言った
「そんなことは知らない。あなたとあいつの夫婦愛について聞かされたことはままあるが、最近はあってないからな」
「そうですか。・・・・・・そうですよね」
「そう気にするな。今でもあいつはあなたの事を愛している。あなただって、この12年間ずっとそうだったんだろう？」
「・・・・・・はい」
「それで、いい」
伯爵は、にっこりと笑った。ここに娘が来ることになるとは、まだ知らない。
夏の日差しとさわやかな風は、紅茶の匂いを彩った。

6．夜行

リリーとキャシーは、ゆったりと南東を目指していた。アウシュトララーゼポリス、昔はコペンハーゲンというわりと小さな国の首都だったらしいが、そこからブダペストまではかなりかかる。先史にあった、飛行機や大陸横断鉄道などというものは、今は２０１２年の『光臨の日』以来電子機器系統が破壊されたり、人口の激減や技術者の消滅などによって、全くと言っていいほど使えない。それに、精神反射に気付いた人類の多くが、科学技術の復興より先に精神反射の技術向上はしったために、大幅に工業化に遅れたのだ。今ではアウシュトララーゼポリスには超高層ビルが立ち並び、自動車もかなり走っているが、それは極めて限られた高所得者だけで、隔離政策をとられている非能力者や、辺境の農村や田園地帯には全くと言っていいほど普及していない。とはいっても、ランガスカー王国で初めて先史自動車の運転に成功したマック・モナル少年から、自動車はだいぶ進歩の道をたどった。が、今キャシーが運転している土埃だらけのジープはどんなにがんばっても、朝飛ばしたスピードの１０分の１も満足には出せなかった。

キャシーの話だと、ずっと運転し続けても着くのは明日の朝になるようだ。最初のほうはまだ落ち着いていたリリーも、だんだん日が傾くにつれていらだちを隠せず、しきりにため息をついたりしていた。

「そんなことしたって、今日中にはつかない」

「・・・・・・うるさい、キャシー。いくら班長が遅くてもいいといったって、向こうはかっとばしてついてんでしょう？」

「そんなことは聞いていない」

「でも・・・・・・」

「あせったって仕方がない。明日の朝まで何とか飛ばすから。運がいい方だぞ、だってこれは新車だからな」

リリーは再び土と赤錆にまみれたジープを見て、ため息をついた。つぎはぎで、アクセルとブレーキ、あとはハンドルだけ。サスペンションもまともについていない。平坦な道で車は激しく上下し、左右前後で大きさのそろっていないタイヤが、きしみながら必死に広大な田園地帯を走っていた。はたから見れば滑稽でしかない。しかし、反発は時間の無駄だと悟ったリリーは、話題を変えることにして、安定しないぼろぼろのシートにできるだけ落ち着くよう深く腰を下ろした。

「アレグロっていう、あの人何者かな？」

「アレグロ・・・・・・ああ、私の命の恩人か」

「命の恩人忘れる？普通」

「たまたま出てこなかっただけだ。あれは私もあのあと気になってな」

私はどきっとした。

「気になった、って、キャシー・・・・・・あなたがそんな感情を・・・・・」

誤解されたことに気付いたキャシーは、あわてたそぶりを全く表情に出さずにすらすらと答えた。

「そんなわけないだろう。気になったのは、あの少年の全貌さ。どう考えたって、精神反射を常に行うなんてありえないし、そんな体力を持ち合わせている人間は、ほとんどいない。大体あの少年私たちと同じぐらいの年だっただろう？」

「そういえば、うん、そうだね。確かに・・・・・・でも、ずっと精神反射してたのは、私たちのエネルギーを回復させるためじゃ？」

「空気１立方メートルの温度を１００度上げるのに板チョコ一枚分のエネルギーを使うというのにか？そこまでするか？」

リリー以上に女っぽくない声でキャシーは無表情に畳みかける。

「うーん、確かにそれはあるけど・・・・・・」

「それだけでもう数は限られる。あれだけの精神反射ができる人物は、世界に存在していただけでも６人ぐらいだ。一人は、さっき死

んだエオラヌス1世」
「ちょっと・・・・・・！言い方ひどいよ。不敬罪で捕まったらどうするのよ」
「大丈夫、リリーは通報しないから。彼は文句なしの魔法使いだ。国境結界を一人で維持できた王は歴史の中で彼とランガスカー・アウシュトララーゼだけだ。これでもう2人、これらはみんな死亡している」
　リリーは喋るのをやめてキャシーの言葉に耳を傾けながら、思考を巡らせる。国境結界は、敵の侵入と、外部との接触による問題を起こさないために、通行を禁止した精神反射線だ。無理に侵入すると、電撃か火炎放射によって灰になるか、空間弾性波で吹き飛ばされるか、どちらかしかない。これを突破できるものは、今までいなかったといわれているが、ある研究者たちや、都市伝説では、ここ数年の間に一人、外と中を行き来した人間がいる、という話もある。あまりに強大な力で、しかも24時間体制のため、通常は、彼直属の王室付参事官の部下たちが交代で維持をしている。が、エオラヌス1世はそれを必要とせず、自ら一人でそれを成し遂げた。
「まだ存命しているはずなのは、“プラハ事件”で島流しにされたシェリーヴァ・ドラクロス元公爵。確か彼は今、大西洋の孤島に島流しにされている。あ、そうだ、島流しならいっぱいるな、もう2人だ。国境結界を外から越えてきたために危険人物扱いでセントヘレナに追放された楊龍瞬（ヤンリュイシュン）、もう一人は、あ・・・・・・」
　そこでキャシーが独白を止めた。下を向いて聞いていたリリーは、ふいに顔をあげた。
「どうしたの？」
「謎が、とけたかもしれない」
「え？」

　ジープはずっとずっと、星空の下をひたすら走り続けた。が、キャシーは、謎が解けた、と言ったきりその続きをいっこうに言おう

としなかった。リリーは、眠たくなりながらも、ここで眠ったら、明日の朝につくはずのブダペストでクラウゼヴィッツやボリスに叱られたくないし、からかわれたくもない。気合いでまぶたを引き上げながら、キャシーに食いつく。

「さっきから何度も聞いてるけどさ、謎ってなんなの？」

「・・・・・・今話すとめんどくさいだろ」

「どうして？」

「向こうでまた説明しなきゃならない」

「それ、私がやるから私に教えてよ。手柄を別に横取りするとかそんなんじゃないからさ」

言ってしまってからリリーは、それが余りキャシーに好印象を与えないことに気付いた。眠気で頭が呆けてしまっている。どこか別の世界に飛んで行きそうだった。

「・・・・・・まあいいか、じゃあ説明は頼む。もう一人、セントヘレナに流されたやつがいるんだ」

「それ、誰？」

「５０年前、『ローマ・キリスト教徒の乱』で、唯一死刑を免れた、カール・ゾラクルス大司教だよ。彼はまだ２４歳だったし、まだ忠誠化を必要とするほどでもなく、狂信的なキリスト教徒に主犯格に祭り上げられただけだったからね。でも彼のおかげで、どちらのサイドも合わせれば十万人の戦死者だ。責任は重いさ。よく死刑にならなかったよ」

キャシーはとげとげしく言う。

「キャシー、そのカールなんとかっていう人って、今回の事件には関わってるの？」

「彼は、前のキッズ・アノーラのリーダー、総裁だよ」

「うそ！」

「ほんとうだ。彼はなかなか気弱な所もあったが、人格者だったからね。今でもキリスト教徒やらからの信頼は厚いのさ。だからキッズ・アノーラみたいなのが続いてんだ。・・・・・・続きはまたあ

と詳しく話してやる。寝ていいぞ」
「いや、私は・・・・・・」
「寝ろ」
キャシーはリリーの瞼に精神反射をかけ、無理やり閉じさせようとした。私は必死に抵抗したが、キャシーがリリーの中枢神経に侵入して子守唄を奏で始めると、リリーは突然死んだように、眠りの世界に沈んで行った。ジープの音だけが、満天の星空の下に響いていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2724o/

Legends of shooting stars　ノアの方舟と１３人目の男

2010年11月16日23時40分発行